

令和5年度

一般入学試験B日程 学科試験問題

国語

1. 試験時間は、60分間です。
2. 問題は、この冊子の1～20ページにあります。解答用紙は別に2枚あります。
3. 解答は、解答用紙の問題番号に対応した解答欄に記入してください。
4. 問題や解答を、声に出して読むはいけません。
5. 印刷の不鮮明、用紙の過不足については、申し出てください。
6. 問題や解答についての質問は、原則として受け付けません。
7. 終了の合図があったら、すぐ筆記具を置いて、解答用紙を机の上に伏せてください。
8. この問題用紙は、持ち帰らないでください。
9. 不正な行為があった場合は、解答をすべて無効とします。
10. 答案の文字は、ていねいに、かつ明瞭正確に書いてください。
11. その他、試験の進行については、監督者の指示に従ってください。

植草学園大学 発達教育学部

受験番号		氏名	
------	--	----	--

第一問 次の文章を読んで、後の問い（問1～6）に答えなさい。

「お母さん」が示す社会的性役割の不均衡

私の娘は二歳までは保育園、三歳からは預かり保育のある幼稚園に通っている。自分は^Aサイリヨウ労働制の下で働いているから、定時の仕事に就いている連れ合いに比べて時間の都合をつけやすい。そのため、自分の方が入園式や終業式といった行事に出ることが自然と多くなる。

そして、そのような場では、居並ぶ保護者に向かって先生が「お母さん方は……」と呼びかけるケースがよくある。自分はそのたびに少し肩身が狭いような、みそっかすになったような気分になるのだが、ただ確かに、その場にいるのは圧倒的に「お母さん」たちなので、先生の方からしてみれば、目の前にいる人たちに対する自然な呼びかけなのだとも思う。（自分もそういう場では何となく憚^{はば}って、目立たない隅の方にいつも座っている。）

いまこの国で、家庭において夫が育児や家事に費やす時間が上昇する傾向にあることは間違いないが、ほかの先進国に比べて低い水準に留まっているのも事実だ。つまり全体として見れば、依然として育児や家事のかなり多くの割合を妻の方が担っている状況は変わっていない。

こうしたなか、コンビニ大手のファミリーマートが販売する総菜のシリーズ商品が「お母さん食堂」と銘打たれたことに對して、「食事は母親が担当するものという意識が社会で強化されてしまう」という類いの批判が出たこと——そして、実際に高校生有志が、名称変更を求めるオンライン署名活動を行ったこと——は記憶に新しい。

それから、一九五〇年代から続いている「おかあさんといっしょ」というNHKのテレビ番組も、その名前が「育児は母親が担当するもの」という性役割の固定化に一役買っているという指摘は以前から見られる。二〇一三年からは「おとうさんといっしょ」という名前の派生番組が同局で始まり、^A時代や人々の意識の変化に即している面もあるが、ほぼ毎朝放映されている「おかあさんといっしょ」という番組名自体に変更はない。

「母」のつく熟語をめぐる問題

ジェンダーバイアス(社会的な性役割についての固定観念)をめぐる問題に関しては、「お母さん」という言葉以外に、「母」というこの一語自体が社会で含みもってきた特定の意味合いも無視できない。

たとえば、「母語」、「母国」、「母校」といった言葉は、文字通り母体のなかで受精卵が子へと成長して生まれ出てくるという[B]的事実や、その後の育児を行う役割を主に母親が担ってきたという[C]的事実が基になっていると言える。つまり、言語であれ、国であれ、学校であれ、自分を産み育てた根源や基盤の比喻として「母」が機能しているということだ。そのため、たとえば先の「母語」という言葉を「第一言語」等の言葉に置き換えると、「母語」のもっているいわば「根源的な言語」というニュアンスが希薄になるだろう。すなわち、生まれた後にいつの間にか身についており、以来そこから完全に離れることができず、自分自身をかたちづくる大きな基盤となっているもの、というニュアンスである。

しかし、子どもの誕生にはもちろん父親もかかわっているし、育児を母親が担うのも必然的な事柄ではない。むしろ、「母語」、「母国」、「母校」といった言葉の使用——さらに、たとえば「運営母体」のような、「母体」の比喩的用法——は、この社会におけるジェンダーバイアスを維持する土台の一部を構成しているのかもしれない。実際、先の「母語」という言葉について言えば、たとえばある論文において、『母語』というのはジェンダー化された表現なので、実際には『親語』といった用語をあてるべき」という主張がなされたりもしている。

しかし、当該の論文で直後に「今のところ一般的に用いられる適切な代案がない」とも言われているように、「母語」を「親語」に言い換えることは(少なくともいますぐには)不可能だ。なぜなら、先に確認したような「母」という言葉が含みもつ意味合いを、「親」という言葉は歴史的に備えていないからである。また、「母」の比喩的意味が通底している言葉は、「母国」、「母校」、「母語」のほかに、「空母」、「母船」、「母屋」などさまざまなものがある。このように無数の言葉が相互に浸透し、つながり合っているなかで、「母語」という言葉だけ「親語」などに置き換えたとしても、それは不自然で浮いた言葉であり続けるだろう。

では、「母」のつく熟語は一挙に別の言葉に置き換えてしまえばよいのだろうか。しかし、まずもって、どこまで置き換えればよいのだろうか。たとえば、「酵母」や「分母」、「母集団」、「母数」、「母音」といった言葉も全部別の言葉に換えるべきなのだろうか。だが、前章で外来語について強調したのと同様に、私たちの生活に深く根を張っている言葉たちを急に

引っこ抜いて、よそよそしい言葉に置き換えることは、その分だけ日本語の表現力や、日本語を用いた思考力を「イゼイジャク」なものにしてしまう。「母」のつく熟語を一切用いることなしに思考し、表現し、生活を送ろうとするのは、いまの私たちには困難きわまりない。

母語を学ぶことは、伝統へと入りゆくことを含む

母や母体の「ウガイネン」が特定のイメージ——何かを産み育てる基盤、根源、大本といったイメージ——を含みもつことは、そもそも、古今東西の多くの文化にかなり古くから見られる特徴だと言える。たとえば、ギリシア神話など各地の神話には、世界や生命の根源として位置づけられる地母神（大地の母なる神）がしばしば存在する。また、中国の『老子』にも、世界の根源について「可以爲天下母（それは天下の母といふべきものだ）」（第二十五章）と表現する一節がある。同様の例は、ほかに数多く見出すことができるだろう。

そして、この種のイメージは日本の文化においても存在し、それが独自の具体性をもって行き渡り、生き続けている。それは、「母屋」や「酵母」等々の言葉というかたちで、文化遺産としての日本語にもはっきりと認められる。日本語であれ、あるいは別の自然言語であれ、子どもが「母語を学ぶこと」は、それぞれの言語が息づく文化の伝統的なイメージないしは物事の見方を学ぶことを伴うのだ。この点について、現代の哲学者ジョン・マクダウェルは次のように述べている。

各々の言語が世界の見方であるというのは、各々の言語が（言語学者が考えるような意味での）特定のタイプの言語であるからではなく、各々の言語において語られる事柄ないし伝えられる事柄のゆえである。……世界を視野に入れるという観念は、成長して伝統へと入っていくという観点においてはじめて理解可能となる。そして、成長して伝統へと入っていくというのは、普通の意味で言語を学ぶことの一部を成している。その学習において、人はたんに眼前を過ぎ去る光景の諸々の相貌に対して言葉で反応する傾向性を獲得するだけでなく、どのような事柄を言うべきかを学ぶのである。

伝統は変化し、言葉も変化する

マクダウエルの言う通り、伝統へと入って行くことは、母語を学ぶことの一部を成している。ただし、このことはもちろん、物事の伝統的な見方はすべてそのまま受け継がれて保存される、ということの意味するわけではない。言語は生ける文化遺産であって、私たちの生活のかたちが絶えず変容を続けるなかで、言葉やその用法も変わり続けている。

そして、特定の言葉に対する違和感は、社会や物事のあり方に対する私たちの見方が変わりつつあることを示す重要なサインでありうる。たとえば、「お母さん食堂」や「おかあさんといっしょ」といったものに見られる「お母さん」の用法は、現在でも疑問に思ったり不自然に感じたりする人が一定数おり、今後その割合は増えていくだろう。

私自身に関して言えば、娘をどの幼稚園に入れるか^{ケントウ}していった頃、近所のある幼稚園の説明資料のなかに、「お昼はお母さんの愛情弁当をご用意下さい」と記してあって驚いたことがある。我が家では、家事・育児分担を相談した結果、娘が幼稚園に通っている間は私が妻子の「愛情弁当」をつくることになっていたから、この文面には面食らい、がっかりした。そして、（ほかにも理由はあったが）この園は選択肢から外した。家族にはさまざまなかたちがあり、多様な育児・家事のあり方が存在するということが、この園の方々には見えていないか、見ようとしていないように思えたのだ。

「機械的に置き換える」のとは別の仕方

「お母さん」の用法が変わっていくなかで、その遠い先に、「母語」や「酵母」や「分母」も何らかの別の言葉に置き換わる未来がくるかもしれない（あるいは、こないかもしれない）。それは現時点では不明だが、いずれにしても、「母」は「親」に」という風にして言葉をただ機械的に置き換えようとしても、うまくいくものではない。

たとえば、いま発達心理学や看護学などの分野で用いられることのある「親性」という言葉は、女性にも男性にも共通する親としての意識や感情の類いを^オタンテキに指すものであり、必ずしも「母性」や「父性」に完全に取って代わるべき言葉として位置づけられているわけではない。実際、これまで日本語のなかにはその種の意識や感情を表す言葉が無かったため、「母性」や「父性」に加えて、従来は光が当たりにくかった物事の見方を開く新語として、「親性」という言葉が少しずつ世間に広まり始めていると言えるだろう。

生活のなかに深く根を張った言葉の変化は、まさに生活の変化とともに、そして、関連する他の言葉たちの変化とともに、進行していく。言葉には大きな影響力があり——さらに言えば、権威や権力もあり——、伝統の維持にも変革にも働きかける面があるが、同時に、その維持や変革の動きによって影響される面もある。そうした相互的で全体的な影響の中身を、私たちはよく見極めていかなければならない。

逆に言えば、一切の変化に先回りして一挙にすべてを変えることはできない、ということだ。ある個別の言葉に対して、ある人々の間に違和感が生まれてきたときに、自分もその言葉に対してあらためて注意を向けて見直すこと。そして、その言葉に関連する現実（生活のかたち、社会のあり方）をさまざまな角度から見直すこと。自分が見逃してきたものを見ようとすること。そして、その言葉のある種の用法に対して、場合によっては異議を唱えること。——「母」は「親」に言い換えよ、といった単純明快なガイドラインに比べて、遅々とした面倒な方法に思えるかもしれない。だが、私たちの従来の物の見方と密接に結びついている言葉に関して、その変容を促すには、^Fそうした地道な営みこそがむしろ不可欠だ。

（古田徹也『いつもの言葉を哲学する』より）

*出題の都合上、原文の一部分を改変してあります。

問1 ア～オのカタカナで示した語の傍線部分と同じ漢字を含むものを、それぞれ後の1～4の中から一つ選びなさい。

ア サイリヨウ

1 大根をサイバイする
3 演奏会をカイサイする

2 サイバンを傍聴する
4 彼はサイタイシヤだ

イ ゼイジャク

1 セイジャクに包まれた境内
3 ナンジャクな地盤

2 大論争をジャツキする
4 ジャツカン優れている

ウ ガイネン

1 ガイリヤクは理解できた
3 事件にフンガイする

2 テンガイの付いた玉座
4 神宮ガイエンの大樹

エ ケントウ

1 ケンシンのに介護する
3 危険な化学ジッケン

2 胃腸のケンサを受ける
4 特使をハケンする

オ タンテキ

1 サイタン距離を行く
3 タンゴの節句を祝う

2 カンタンな作業だ
4 受付をタントウする

問2 傍線部A「時代や人々の意識の変化に即している」とありますが、意識はどのように変化したと考えられますか。本文の表現を用いて三十字以内で答えなさい。

問3 空欄B・Cに入る語として最も適するものを、次の1～6の中からそれぞれ一つ選びなさい。

- 1 必然
- 2 偶然
- 3 社会
- 4 観念
- 5 自然
- 6 世界

問4 傍線部D「『母』」という言葉が含みもつ意味合い」について筆者はどのように考えていますか。最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 ジェンダー化された表現なので他の言い方に換える必要がある。
- 2 「親」の片方だけを使っていて不自然な言い方だが代案はない。
- 3 何かを産み育てた根源や基盤の比喩であり言い換えはできない。
- 4 育児は母親が担うべきということの象徴でこれ以外あり得ない。

問5 傍線E「母語を学ぶ」とありますが、ジョン・マクダウェルはこれをどのように言っていますか。その説明となる部分をマクダウェルの言葉の中から六十字で抜き出し、最初と最後の五字を答えなさい。

問6 傍線F「そうした地道な営み」とありますが、これはどのようにすることなのかを百字以内で答えなさい。

第二問 次の文章を読んで、後の問い（問1～6）に答えなさい。

寺井承平は、朦朧とする意識の中で、混み合う電車の中から風呂敷包みの荷物を持ち、東京駅のホームに降り立った。喉が渴いていた。

東京の五月はあたたかく、空には薄い青に透明な光が溶けたような明るさが満ちていたが、金沢から電車を乗り継ぐ旅の中で、寺井の目からはすっかりaが抜け落ちていた。東京に到着したばかりだというのに、すでに疲れている。体がだるい。数日前から続く頭痛が、朝よりもさらにひどくなっている。

高熱を押して、故郷の両親と医者に外出を禁じられるのを逃げ出すようにして出てきたのだ。

手持ちの金も苦しく、持ち物も最低限だけ。日帰りになるのはA 厳しいが、今夜の宿も決めていない。

歩き出すと、背中をぶるりと寒気が襲った。目を閉じてここで倒れ込んで寝てしまったら、どれだけ楽だろう。思いながら、自分自身を奮い立たせるようにして道を急ぐ。晴天であっても、それが自分の体調の悪さには何の慰みにもならないことが恨めしかった。

目指すは、帝国劇場。

ヴァイオリニスト、フリッツ・クライスラーの音楽会。

寺井は一昨年まで東京に住み、作家を目指していた。

金沢にある寺井の生家はもともと呉服などを扱う商家で、父が県会議員を務めていた。そんな父が、息子にも同じ道を歩ませようと考え、寺井を明治大学の法科に進ませたのだ。

同じ大学の大先輩には、中退した菊池寛がいた。

そこからもう、寺井のその後は決まっていたと言ったら大袈裟だろうか。法科に在学しながらも、法律よりも文学に興味を移していった偉大な先輩の存在をなぞるようにして、寺井は上京してすぐから法科の勉強そっちのけで古本とレコードに夢中になった。

もともと、小説が好きだった寺井は、明大受験のその日にも、試験が終わってすぐ、神保町の交叉点近くにあると聞いて遠く懂れていた古本屋、岩波書店を見にいった。岩波書店の屋上には、開店にあたって岩波茂雄が夏目漱石に書いてもらったという、金字で象られた看板がある。

漱石の書いた『岩波書店』の文字を前に、「ああ、この街に漱石がいたことがあったのだ。これからここで暮らすのだ」と晴れがましい思いがこみあげた。

大学に入学してしばらくすると、好きが高じて古書店やその近辺で催される文学好きの集会に出入りするうち、同好の士に恵まれるようになった。作家の家に書生として出入りしているような者も多く、彼らと文学談義をくり返すのは楽しかったし、誘われて、同人誌も何冊か発行した。目をかけてくれた編集者もいたし、その人のついでで文芸誌に小説が載ったこともある。

父が病に倒れた、という知らせを受けなければ、今でも東京に残って、それらの活動に没頭していただろう。小説を読むことと書くことが楽しすぎ——それに、趣味である音楽のレコードを聴いたり、音楽会に行くことにも忙しく、肝心の大学にはほとんど顔を出さなくなっていた。その後ろめたさもあって、親とは手紙のやりとりさえ遠のいていた。突然の病の知らせにはさすがに驚き、取るものもとりにあえず金沢に戻ったが、寺井の心配に反して、父は思いのほか元氣そうだった。倒れた、というのは嘘ではなかったが、それは二、三日で回復するようないしたことがない風邪で、音信がない息子を呼び戻す口実だったのだとすぐにわかった。

小説を書くなんて聞いていない、と、寺井の語る文学を道楽と決めつける両親に、言いたいことは山ほどあったが、親の懐に甘えて、仕送りを受けながら法科の勉強を疎かにし、留年までしていたことは言い訳のしようがない。父親からは学費を打ち切られ、休学を申し渡された。

頭を冷やせ。心を入れ替える。さもなければ、故郷に戻って見合いして妻を娶れ、という両親に気圧される形で、寺井は半ば強引に金沢に連れ戻された。仕送りを打ち切る、と言われてしまっただけでは、自分の小説の仕事だけではとても食べていかれなかったからだ。

作家仲間にはそんな寺井を「逃げるのか」と腰抜け扱いする者もいたが、寺井は彼らにも編集者たちにも、「いずれは戻

る」とはつきり告げていた。

金沢に帰っても小説は書き続ける。出版社にも送る。

それらの評判がよければ、ふたたび東京に戻れる日も近いだろう。帝都は確かに文化の拠点であり発信地だが、何もそこにいなければ小説が書けないということはない。

しかし、寺井のそんな思いも空しく、金沢での時間は無情に二年が過ぎた。

かつて、詩人の室生犀星が「何とかして東京に出てなるかならぬか判らぬが、詩人として立ちたいのぞみを持ち」と上京してもしばらくはうだつが上がり、郷里金沢との間の往復を強いられていたと聞くが、その気持ち、寺井には今よくわかる。

当時の作家仲間たちは離れた土地に暮らす寺井を、同人誌にも遊びにもめっきり誘わなくなったし、「また連絡するよ」と言ったはずの編集者からも何の音沙汰もない。目をかけてもらっている、と思ってきたが、彼らがああ頃声をかけていたのは寺井だけではなかった。それにひよつとすると、彼らからしてみると、自分など、目をかけたにも入らない存在だったのではないだろうか。

この二年で、そんなふうになり知ることになった。

仲間たちが作った同人誌は、既存の作家の真似のような、いかにも至らないありふれた表現と題材に満ちていたが、送られてくると、東京で流れる時間を見せつける目的でそうされたかのように感じて **b** が沈んだ。破り捨ててしまいたくなつたことも一度や二度ではなかったが、それらだけが東京の生活の名残のように、自分とあの場所を繋ぐのだと思うと容易にそうもできず、それがまた **E** 忸怩たる思いとなつて胸を締めつけた。

寺井は二十四歳になっていた。

芥川龍之介が「新思潮」に『鼻』を書き、夏目漱石に絶賛された年を超えている。また、同年代・同郷の作家、島田清次郎の『地上』は部数三十万部を超えたベストセラーだと聞く。島田とは会ったことはないが、彼が自分の実家とほど近い金沢第二中学校の出身であることを知った時、どれほど激しく心がかき乱されたことか。

それなのに、寺井の胸には一向、新作を書こうという気持ちが起こらない。むしろ、そうした話を聞けば聞くほどに焦り

と苦しきだけが募って原稿に向かう **c** が失^うせた。自分はもう終わってしまった作家なのではないか、という思いが唐突に胸を衝くと、それはもう、心底悔しかった。

まだ一、二度文芸誌に載った程度。それなのに、書きたい **d** がこれほどに色あせるとは。東京でまだ学生だった頃の希望に燃えていた自分に対して、不甲斐なく、情けない気持ちができるのだった。

クライスラーの音楽会開催を知らせる広告絵葉書が届いたのは、そんな頃だった。

それは、寺井がまだかろうじてつきあいのある東京の出版社の編集者から送られてきた。当時の仲間とも、他の編集者ともめっきり疎遠になった中、彼とだけ縁が続いていたのは、ひとえに共通の「レコード」という趣味による。

彼が属する文報社は、文芸誌の中でも演劇と音楽についての批評を多く載せることで有名な雑誌「文雅」を出していた。その編集部に属する金藤^{こんどう}は、中でも無類の音楽好きとして知られていた。編集部では金を出せない、経費で観られないというものにまで自腹を切って日参する。

一方、寺井もまた、音楽が好きだった。

新しもの好きな父が求め、実家にあつたレコードを、その頃まだ家にいたねえやとよく聴いた。日本橋にある電機会社の重役の家に奉公に出ていたねえやは、その家で聴いたというレコードのこともよく知っていた。

思えば寺井の東京への憧れは、そのねえやによってもたらされたといってもいいのかもしれない。彼女の語る東京は、弾むような豊かさに溢れた、華やかな文化の地だった。

金沢ではそうそう観られないプロの生演奏が音楽会で聴けるのだということも、彼女が教えてくれた。「私は行ったことがないですけど、奉公先の旦那様や奥様はよく行ってらっしゃいました」と語る彼女の影響で、寺井は上京してすぐにヴァイオリン演奏会に行き、そこで、得も言われぬ衝撃を受けた。

その時の弾き手はそこまで名のある人物というわけではなかったが、それでも、広いホール全体の空気を震わせるヴァイオリンの音はレコードとまったく違い、伴奏のピアノの豊かな **e** にも、心が痺^{しび}れるような感動を覚えた。

以降、寺井は小説を書く傍ら、レコードや音楽会に夢中になった。

中でも、金藤の家には世話になった。

彼が道楽に任せて集めたレコードを貪^{むさぼ}るように聴き、彼の奥さんが入れたあたたかいお茶を飲むあひとき。彼が同好の士に甘いのをいいことに、金藤の留守中に仲間と訪ねて行って、奥さんに呆^{あき}れたこともあった。

東京からの金藤の手紙は簡素なものだった。

「寺井くんが好きだと思ったので、知らせます。」

その文面とともに、クライスラーの写真が刷られた絵葉書が同封されていた。

(辻村深月『東京會館とわたし 上 旧館』より)

* 出題の都合上、原文の一部分を改変してあります。

問 1 空欄 a ～ e に入る語として最も適するものを、それぞれ次の 1 ～ 5 の中から選び番号で答えなさい。

- 1 気分
- 2 生氣
- 3 氣力
- 4 情感
- 5 衝動

問 2 空欄 A に、本文の意味から考えて最も適するものを、次の 1 ～ 4 の中から一つ選びなさい。

- 1 常識的にも一般的にも
- 2 経済的にも日程的にも
- 3 体力的にも精神的にも
- 4 現実的にも実際のにも

問 3 傍線部 B 「夏目漱石」の小説を、次の 1 ～ 5 の中から一つ選びなさい。

- 1 破壊
- 2 蒲団
- 3 浮草
- 4 三四郎
- 5 高瀬舟

問4 傍線部C「それらの活動」とは何か。二十字以内で答えなさい。

問5 傍線部D「腰抜け扱い」とありますが、寺井承平はなぜ腰抜け扱いされるのか。本文の意味から考えて最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 文学を諦めて故郷に帰るから
- 2 法科の勉強を疎かにしたから
- 3 勉学に励まず留年をしたから
- 4 故郷に戻って見合いをするから

問6 傍線部E「忸怩たる思い」とありますが、寺井承平はどのような思いでいるのですか。「名残」という言葉を使用し、また、解答欄最後の「思い」に続くように三十字以内で答えなさい。

第三問 次の文章を読んで、後の問い（問1～5）に答えなさい。

では、人の行動にかかわる「学び」は脳内のどんなメカニズムによって支えられているのでしょうか？ その答えは、人に期待や意欲をもたらす「欲求」のメカニズムにあると考えられています。

「報酬系回路」は新たな行動を促す「冒険システム」

ドーパミンという物質をご存じでしょうか？

脳の奥深くには「ドーパミンニューロン」という神経細胞が存在し、そこから放出されているのがドーパミンです。これは人がなんらかの「報酬」を得たときや予期したときに放出され、人に快感をもたらすと考えられている神経伝達物質の一種です。そのため、ドーパミンニューロンを核とする神経ネットワークは「A報酬系回路」と呼ばれています（ここで言う「報酬」は、お金のことだけでなく、「生物がそれを求め、それを得ることで快を感じる」というような、より広い意味で用いられる心理学や神経科学の用語です）。

この神経ネットワークの大きな特徴は、報酬そのものよりも報酬を期待することに強く反応するシステムであるということです。シユルツ博士らの研究によると、ドーパミンニューロンは最初、報酬が与えられたときに働くのですが、次第に報酬を得たときから「報酬を期待できるとき」に働くようにタイミングが変化することが確かめられています。こういったことから報酬系回路は、人の欲求、つまり「欲しい」や「やりたい」を支えるメカニズムだと考えられています。

また非常に興味深いことに、報酬を期待したのに与えられなかったときは、その後のドーパミンニューロンの活動がアイチジルしく低下してしまいます。こういった神経活動は、将来得られる報酬を最大化するための非常に合理的な仕組みであり、人が新たな行動パターンを身につけるときの主要なメカニズムの一つだと考えられています。考えてみると当たり前なのでしょうが、いま、ここにあるものに満足しているだけでは新たな行動は起りません。人は「欲しい」「やりたい」と感じるものを見つけたときに、今までと違う行動をするのです。そしてその結果、何か「報酬」を得られればその行動をもつと

するようになり、また逆に期待を裏切られたらその行動をしなくなります。これはとても **B** で、しかしながら **C** な学習のメカニズムです。

また報酬系回路の中には、前頭前野の一部が含まれていて、同じくドーパミンの放出によって活性化することがわかっています。前頭前野は合目的で意図的な知的活動における脳の最重要部位と考えられていますので、ドーパミンは人の「欲求」と同時に、報酬を得るために自分自身を「制御」する回路も司っているということになります。つまり、知性（いま何をどうするかという状況の判断や、何を得て何を諦めるかの取捨選択など）が活躍するメカニズムなのです。意識的な思考の働きを低下させて即時の行動を引き起こす「防御システム」とは、かなり異なる特徴を持っていることがわかりただけるかと思えます。

私なりに表現するならば、欲求に基づく行動を引き起こす報酬系回路の働きは、人間にとって「冒険システム」とでも呼べるメカニズムなのです。冒険は常に、ワクワクする気持ちと困難を乗り越えるための試行錯誤や創意工夫に満ちています。人のそういった営みを支えているのが、ドーパミンニューロンを中心とする報酬系回路なのだと考えられるのです。

人の欲求を刺激するさまざまな「報酬」

人にとって何が「報酬」になりうるのかを知っておくことは重要です。

ここで言う報酬にはさまざまな種類が存在していますので、少し整理しておきます。人の欲求を引き起こす報酬は、生理的報酬、学習的報酬、社会的報酬などと分類されています。水や食べ物、性的パートナーなど生命を維持し繁殖していく上で必要なものが**生理的報酬**、お金などそれが必要なことを後天的に学習するものが**学習的報酬**、人と協力したり、賞賛を受けたり、利他的な行動をしたりなどの社会的行動によってもたらされるものが**社会的報酬**です。

「おいしい食べ物」「働いて得た給料」「周囲からのほめ言葉」。こういったさまざまな報酬は、見た目には「まったく異なっている」ように感じられます。ところが脳内の報酬系回路は、報酬の種類によらず（細かな違いはありますが）、おおむね共通の基本メカニズムが存在していることがわかっています。逆に、ドーパミンニューロンを刺激し報酬系回路を活性

化させる存在や体験こそが、人にとっての「報酬」である、と言えるのかもしれませんが。

その意味で、近年の脳・神経科学の研究によって光が当たった、少し意外で重要な知見があります。それは苦痛の回避は、それ自体が「報酬」となりうるという発見です。つまり、人がなんらかの苦痛から逃れられたときや、嫌なことを回避できたと感じたときに報酬系回路が活性化されて、他の報酬を得たり、期待したりしたときと同様の体験をしている可能性が高いのです。

心理学の世界では以前から、「回避行動の消去」の難しさについて議論されてきました。何か嫌なことから逃れるための行動が、もう嫌なことを経験しなくなった後でもずっと継続する場合が多いことが不思議だったからです。例えば、学校でとても嫌なことがあったお子さんが、その問題が解決してもう嫌な体験をしないことがわかっていても、なかなか学校に行けない場合があります。これは、一時的な回避手段であったはずの行動が、ずっと維持されてしまっている状態です。「嫌なことからの回避」という体験そのものが報酬系回路を刺激するという神経メカニズムは、そういった現象の基盤となっているのではないかと考えられています。人にとっての報酬は、その人が「欲しい」「やりたい」と感じるような、わかりやすい「ごほうび」だけではないのです。場合によっては本人すら気づかない「報酬」もありうることを、私たちは知っておかなくてははいけません。

D

さらにもう一つ、非常に重要な知見をご紹介します。それは悪いことをした人に罰を与える「処罰感情の充足」もまた、人間にとって非常に魅力的な「報酬」の一つであるということです。米『サイエンス』誌にケイサイされた研究によると、なんらかのルール違反を犯した相手に罰を与える体験をすると、報酬系回路の主要部分の一つ（背側線条体）が活性化することが報告されています。興味深いことに、この部位が強く活性化した人ほど、自分自身が損をしてでも相手に罰を与えようとする傾向があったのです。

これはとても不思議なことです。誰かに罰を与えても、自分には何のメリットもないどころか、損をすることがわかっていて。その状況で罰を与えようとするというのは、自分が支払う損による「苦痛」以上の、強い「快感」がなければ起これ

ないはずで、これらの結果は、人が規範違反を罰することで、強い満足感や快感情を得ているという仮説を支持するものだと考えられています。

こういった処罰欲求は、いったいなぜ人間に備わっているのでしょうか？

一つの仮説として有力だと考えられているのは、社会の規範やルールを維持するための役割を果たしているのではないかとことです。誰かがずるをして富や食べ物などを独り占めしたり、安全な環境が脅かされては困ってしまいます。悪いことをした人に罰を与えたくなる心理は、コミュニティメンバーのルール違反を相互に「ヨクシ」する働きがあると考えられます。そのため、こういった視点の処罰感情は「利他的処罰 (Altruistic Punishment)」と呼ばれます。自分のためではなく、社会のために誰かを処罰しようという発想にもとづく言葉です。

しかしながら、その後の研究では、処罰行為は規範を維持するためだけのものではなく、相手にネガティブな体験を与えることそのものが目的となっているような悪意ある処罰 (Spiteful Punishment) もまた、報酬系回路を活性化させると報告されています。つまり単に相手を苦しませるだけの行為でも、人は気持ちよくなったり、充足感を得たりすることがあるのです。また、怒りの感情が背景にあって、その行為がなんらかの復讐の機会となっている場合に、報酬系回路の活動がより高まるという報告もされています。みなさんも、意地悪な相手やずるをした人に、仕返しをすることで気持ちがすっきりと晴れた経験があるかと思えます。

どうやら、他者に苦痛を与えようという行為そのものが、人にとっての「社会的な報酬」の一つになっているようです。

^E 私たちはこの事実をどのように受け止め、どう向き合っていくのかを真剣に考える必要があるのではないのでしょうか。

(村中直人『ハ叱る依存Vがとまらない』より)

* 出題の都合上、原文の一部を改変してあります。

問 1 傍線部ア～オのカタカナは漢字で、漢字は読みをひらがなで答えなさい。

問 2 傍線部 A 「報酬系回路」の説明として最も相応しくないものを、次の 1～4 の中から一つ選びなさい。

- 1 ルール違反した人を厳しく罰したり、意地悪をされた人に復讐をしたりするときにも活性化する。
- 2 「欲しい」「やりたい」という欲求を満たすためには、どんな困難も乗り越えようと働き続ける。
- 3 なんらかの報酬を得たときや、報酬を予期したときに快感情をもたらす神経伝達物質を放出する。
- 4 欲求だけでなく、適切な状況判断や取捨選択を促す創意工夫に満ちたメカニズムとして機能する。

問 3 空欄 B、空欄 C に入る言葉の組み合わせとして最も適するものを、次の 1～4 の中から一つ選びなさい。

- | | | | | |
|---|---|-------|---|----|
| 1 | B | アクティブ | C | 自然 |
| 2 | B | ユニーク | C | 平凡 |
| 3 | B | パワフル | C | 複雑 |
| 4 | B | シンプル | C | 強力 |

問 4 空欄Dの見出しとして最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 ずるには甘くていい!
- 2 他者の不幸は自分の不幸
- 3 損をしてでも罰したい?
- 4 仕返しはしてはいけない

問 5 傍線部E「私たちはこの事実をどのように受け止め、どう向き合っていくのかを真剣に考える必要があるのではない
でしょうか」という筆者の呼びかけに対して、五十字以内で、「依存」という言葉を使用し、また、解答欄はじめての
文章から続くように答えなさい。